2023年4月2日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

イエスの胸を叩こう

［ルカによる福音書23章32～43節］

ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」〕人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

1. 三本の十字架

今日の聖書の箇所で、3人の者が同じ場所で同時に処刑されている場面が描かれています。普通なら目をそむけたくなるようなおぞましい光景がここにあります。その三人とは、ルカによる福音書23章32節を見ると、犯罪人が二人いて処刑されるために引かれて行った、とあります。そしてもう一人は主イエス・キリストです。この神の独り子である方が、人間の手によって裁かれ、処刑されたのです。「されこうべ」と言われる場所に三本の十字架が立ち、右と左には犯罪人が、そして真ん中の十字架の木に、主エス・キリストがかけられました。

私は先ほど「おぞましい光景」と言いました。何故なら三人の死刑の現場ですから。しかも民衆が、それを立って見ているのです。人の命がその灯を消す瞬間をです。しかしこの三本の十字架は、ここに記されている主イエスと犯罪人のやりとりの故に、私たちに神の救いを約束して下さっていること、人生の最期を迎える時、私たちが出来ることが示されている、聖書の中でも、美しく、慰めに満ちた出来事がここに現されているように思うのです。

今日から主の「受難週」に入ります。伝統的には、今日の日曜日は、イエス様がエルサレムに入って来られた日（エルサレム入城）、そして木曜日が弟子たち皆の足を洗い、最後の晩餐を行った日ということになります。そしてゲツセマネでイエス様は捕えられ、金曜日の朝早くにそのまま裁判と死刑判決、朝9時にはゴルゴタ（されこうべ）の丘に十字架に架けられるというように、恐ろしいほど早く、ことは進んでしまっているのです。今日は日曜日で受難週に入ったばかりなのですが、私たちはもうこの金曜日の出来事を読んでいることになります。

[2] 私たちと一体化して下さった主

イエス様が弟子たちと「最後の晩餐」を開いた時、弟子たちにとってそれがイエス様と共なる最後の食事になるとは思っていなかったと思います。毎年行っている「過越の食事」でした。しかしイエス様は覚悟をされていたのです。これ以降、イエス様は食事をしておりません。飲み物に至っては「神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい」（ルカ22:18）とさえ仰っています。私自身は今の所そういう経験はないのですが、人間にとって、飲食が出来なくなるということは辛いことだと思います。私の父も、二ヵ月ほど前、死を迎える少し前はもう食事が出来なくなりました。主イエス様が人間になられたということは、そのような、ある意味健康状態ではない人間を知り、その者と一体化して下さったということでもあるように思います。

そして主イエスは、人に叩かれ、嘲弄され、見せ物にされながら、されこうべ（ゴルゴタ）の丘の十字架に磔にされました。嘆いていた女性たちもいたとありますが、誰も助ける者はいませんでした。むしろ、主に対して、「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」と揶揄しました。ここに、人間の姿が良く描かれていると思います。私たち人間は罪深く、不幸と思う人を叩くのです。嘲るのです。群集心理も働くのだろうと思いますが、それがまともではないということにブレーキが利かなくなり、他者をおとしめることによって、自らを保つのです。「他人の不幸は蜜の味」でしょうか。

さて、実はこのイエス様と共に十字架に架けられた二人の犯罪人がいた訳ですが、マタイやマルコによる福音書を見てみると（ここでは強盗となっていますが）この二人ともイエスをののしっていたとあります（マタイ27:44、マルコ15:32）。しかし、ルカの方は、一人はイエスをののしりましたが、もう一人は、そのののしる者をたしなめ、イエス様に自分の思いを訴えていったという描写になっています。よくぞルカはこのことを記してくれたと思います。福音書を合わせて考えると、この一人の犯罪人（強盗）は、隣に磔になっているイエスのお姿に心に訴えられるものを感じ、冷静になったのではないでしょうか。信仰とは自分を見つめることに繋がります。神様の前に静まることによって本当の自分自身を発見するのです。それは、聖霊の導きと言っても良いと思います。

今日のポイント39節以下をもう一度読ませて頂きます。―「十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。」

主イエス様は、最初の犯罪人の罵りの言葉に対して何の応答もしておりません。それは、群衆たちや議員たち、兵士たちの罵りに対してもそうでした。イエス様は心の中で「お前たちは滅びてしまえばよい」と思われたと思いますか？私はそうは思いません。イエス様は心の中で祈っておられたと思います。それが23章34節に表されていると思うのです。―「そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」―「自分が何をしているのか分からない」と。これが主イエス様の、人間に対する見方なのです。私たちはサタンの誘惑に無力なんです。主イエス様を捨て、また周りの人間も心の中で殺してしまう。それをイエス様は「自分が何をしているのか知らない」と言われるのです。戦争も、いじめも、ネットの中傷も皆同じだと思います。「自分が何をしているのか知らない」のです。そしてそれこそが罪です。原罪です。イエス様ほど人間を裁くことが出来る方はいらっしゃらない訳ですが、このお方は、その人間の「罪」を一身に背負っていて下さっているのです。何もおっしゃらずに。

[3] 「隣」にいて下さるイエス様に

しかし、この犯罪人も死に臨んでいます。そしてイエス様も今、十字架の上で人間の「死」を経験されているのです。神が人間になったということは、苦しむことと、死ぬことが出来るようになったということです。そして、「死」とは、ある意味人生の精算の時です。神様の前に独り立つこと。私たちは死に臨む時、一体何を思うのでしょうか？私自身、その時、どうなるのか分りません。ハレルヤではなく、主の前に立たされることに対して恐れを感じるような気もするのです。しかし、ルカ福音書のこの一人の犯罪人の主イエスへの訴えは、私たちに信仰の勇気を与えてくれると思いました。―「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」（ルカ23:42）。「ああ、この言葉を祈りにすればよいのだ！」と私は思いました。これだったら言えるように思えるのです。「こんな自分はもうどうなっても良い」と神様に背を向けるのではなくて、死の時でも‟隣”にいて下さるイエス様の胸に飛び込んで行くのです！イエス様の心を叩くのです。遠慮せずに！そこから新しい命が始まるのです！人生の終着局面においても、まだ間に合うのです。増してや、今なら、なお良い。主はあなたの隣におられます！そして、そこで語られる主の言葉は真実なお約束です。主の胸を叩く私たちに主は語られます。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（23:43）と。主が共におられることが「楽園」です。エデンの園の回復です。

蓮見和男先生という、もう引退された牧師はこう言われました。「告白とは、素晴らしい状態の中だけでなく、醜い罪の中でこそすべきことなのです」と。本当にそうです。この犯罪人がそうでした。弟子たちも皆泥だらけの足を主に洗ってもらったのです。「そうしなければわたしとあなたとは何の関わりもなくなる」（ヨハネ13:8）とさえ、主は言われました。私たちも、イエス様の懐に入り込んで良いのです。主イエスこそ、私たちを天の国、永遠の命につなげて下さる「道」なのですから！

お祈り致します。

愛する主よ、今日からあなたのご受難を覚える一週間が始まりました。どうか、それを心に刻み付けて歩ませて下さい。あなたは神であり、そして、私たちの「死」と「苦しみ」をご自分のものとして引き受けて下さったことを思い、感謝致します。どうか私たちが、ボロボロのままでも良い、あなたに私たちの全てを委ねて行く信仰をお与え下さい。これから行われるあなたの愛の記念、主の晩餐式を祝福して下さい。十字架の主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。